

未婚者における結婚イメージ尺度作成の試み

永久 ひさ子*

未婚者における結婚イメージを測定するための、結婚イメージ尺度の作成を行った。全国の未婚者960名を対象に、結婚イメージを測定するため独自に作成した14項目および、結婚希望時期と結婚行動、異性との交際状況などについてweb調査を行った。その結果、結婚イメージは、自由の制約・幸せな生活・性別分業の3因子に分類された。結婚行動、結婚希望時期ともに、自由の制約と幸せな生活イメージが関連する一方、性別分業は関連していなかった。また、結婚希望時期を目的変数とする重回帰分析の結果、有意な要因は男性では幸せな生活と年齢、女性は自由の制約と幸せな生活であり、年収200万円以上の男性と年収100万円以上の女性である本研究の協力者においては、年収は関連しないことが明らかになった。

Key words : 未婚化, 結婚, イメージ, 尺度, 自由の制約

問題と目的

日本では晩婚化・未婚化が進行している。未婚化は欧米でもみられる現象であるが、結婚していない理由には文化による違いが見られる。内閣府の調査によれば(2016)、欧米(フランス・スウェーデン・イギリス)では「同棲のままで十分だから」「結婚する必要性を感じないから」が未婚の主な理由であるのに対し、日本は「適当な相手と出会わない」が最も高い。また、「独身の自由さや気楽さを失いたくない」が4カ国中最も高い。つまり、欧米は結婚以外の形での家族形成が行われており、それで十分であるための未婚化であるのに対し、日本は、家族形成そのものが行われていないという違いがある。また、結婚が、個人の自由を制約するものというイメージが強いという特徴があるといえる。

結婚意思を持つ未婚者の割合は1987年には男女とも約92%であったが、2015年には男性85.7%女

性89.3%と低下を続けている(国立社会保障・人口問題研究所, 2016)。晩婚化・未婚化の要因として経済的に不安定な若者の増大が挙げられることが多いが(例えば, 山田, 2019), 松田(2016)によれば、男性の場合、年収300万円未満の場合に「経済的余裕がないから」という理由が高いものの、女性ではそのような関連はみられない。

Higgins(1997)は、人の目標志向性を、理想や達成に焦点づけ、獲得を求める促進焦点と、安全や責任を果たすことに焦点づけ喪失を回避しようとする予防焦点に分類した。促進焦点は、利得に焦点化した自己制御傾向を示し、利得の存在に接近、不在を回避するように行動する。予防焦点は、損失の不在に接近し、存在を回避するように行動する。

結婚について考えると、結婚には、幸せな生活の獲得という利得の側面だけでなく、自由が失われるなどの損失の側面もある。促進焦点が優勢ならば、結婚の利得に焦点化した行動として結婚意

*人間学部心理学科

欲が高くなるのに対し、予防焦点が優勢な場合は損失に焦点化し、回避のための行動として結婚意欲が低くなるのではないだろうか。

未婚者にとっての結婚は、未経験の生活についての推測であるため、将来の結婚による利得や損失は各々の結婚イメージによって推測されると考えられる。その結婚イメージには、生育過程での経験や周囲の結婚生活の伝聞、あるいはメディアやドラマに描かれる家族など、その人が生活する場の文化が反映されているはずである。例えば、山村（1971）は、日本人が持つ「献身的・自己犠牲的に家族の世話をし、舅姑に仕え、子供の教育に励む」という母親イメージは、日本の歴史文化の中で長年に渡り構築されてきたものであると述べている。

尺度開発の必要性 結婚が人生の選択肢となった今日、結婚は、自分がどのように生きるのかという生き方の価値観と密接に関連する。また、子どもは婚姻関係の中で持つべきであるとの規範が依然として強い日本では、結婚の選択は子どもや子育ての選択とほぼ同じ意味を持つ。このように、日本における結婚が極めて心理学的テーマであるにもかかわらず、晩婚化・未婚化は、社会学的問題、経済的問題として扱われることが多い。結婚についての心理学的研究はあるものの、そのほとんどは結婚後の夫婦関係であり、結婚意欲など家族形成に関する研究は少ない。例えば結婚への態度を測定する尺度として、結婚コミットメント尺度（伊藤・相良，2015）があるが、結婚後の関係性についての測定尺度であり、未婚者の結婚への態度は測定できない。MAS (Marital Scales) (Park & Rosen, 2013) は、結婚意思と一般的な結婚観および愛情や経済など結婚の複数の側面への期待について測定する尺度であるが、日本における主な未婚理由である自由の制約などの損失についての測定項目はない。

そこで本研究では、結婚行動と密接に関連すると思われる未婚者における結婚イメージの測定尺度の作成を行う。これによって、結婚意欲や家族形成に関する心理学的研究の切り口とすることが期待できる。

本研究の目的 以上の理由から本研究では、若者の結婚行動の変化について、経済的要因以外の心理学的要因を捉えるため、未婚者における結婚イメージ尺度の作成を行う。

方法

調査時期：2022年2月

調査対象：全国の25歳から39歳までの未婚男女960名を対象とした。その際、経済的問題以外の要因を検討するという研究目的のため、男性は年収200万円以上、女性は100万円以上を対象とした。また、都市部と地域には結婚イメージの違いがあると想定されることから、都市部である首都圏と大都市（札幌、名古屋、京都、大阪、広島、福岡）を持たない県の対象者を同数にした。内訳は、首都圏の男女240名ずつ合計480名と、北海道、愛知、大阪、京都、広島、福岡を除く県の男女240名ずつ合計480名である。

調査方法：調査会社のモニターを対象に、Web調査を行った。

調査内容：調査で尋ねた項目のうち、本研究で利用した質問項目は、

1. 結婚イメージ項目：事前に実施した未婚者への面接調査の内容から独自に作成した14項目を1全く当てはまらない、から7よく当てはまる、までの7件法で尋ねた。
2. 結婚意欲をみるため、結婚活動への態度と結婚希望時期について尋ねた。

結婚活動への態度：「一定の年齢で適当な相手がない場合どうするか」

- ①生涯独身の心づもりをする
- ②何もせず成り行きに任せる
- ③自然な出会いを待つ
- ④紹介や婚活で出会いを増やす
- ⑤条件を譲歩変更して範囲を広げる
- ⑥その他 から1つ選択させた。

結婚希望時期：「遅くとも何年後までに結婚したいか」

- ①結婚するつもりはない
- ②時期はわからない
- ③3年以上先
- ④3年以内
- ⑤2年以内
- ⑥1年以内 から1つ選択させた。

3. そのほか、異性との交際状況、年収、年齢、性

別、居住地などを尋ねた。

4. 倫理的配慮：大学の倫理審査委員会で審査を行った（2021-002）。

また、調査の最初にインフォームドコンセントが表示され、同意した場合のみ先に進めるように設計した。

結 果

調査対象の年収概要 調査対象の年収を見たところ、男性は、200万円から400万円が37.9%と最も多く、500万円から800万円が30.2%と次に多い。女性も200万円から400万円が46.0%と最も多くこの層に集中している。400から500万円は13.8%、500から800万円は18.3%と男性より少ない。

結婚イメージ項目の因子分析 結婚イメージ14項目について因子分析（主因子法・プロマックス回

転）を行った。その結果、固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子が妥当と判断した。第1因子に高い負荷がみられた項目は、「結婚すると自由にお金を使えなくなるのだろうと思う」「結婚生活は我慢することが多いだろうと思う」「子どものことが最優先で自分のことは後回しになるのだろうと思う」など、経済的にも心理的にも自由が制約されるという内容であることから、「自由の制約」と命名した。第2因子に負荷が高い項目は、「結婚生活はいろいろと楽しいことが多そうだ」「子育ては楽しそうだ」「心からくつろげる場所ができると思う」という、幸せな結婚生活のイメージであることから、「幸せな生活」と命名した。第3因子に負荷が高い項目は「結局、家事や子育ては、主に妻が担うのだろうと思う」「家計費は夫がほとんど稼ぐのだろうと思う」「重要なことは、夫が決めるようになると思う」など、性別分業のイメージであることから、「性別分業」と命名した。

Table1 結婚イメージ因子分析結果(主因子法プロマックス回転後)

結婚イメージ項目	F1	F2	F3	
13. 結婚すると自由にお金を使えなくなるのだろうと思う	.85	.08	-.12	
14. 結婚生活は我慢することが多いだろうと思う	.81	-.11	-.04	
5. 子どものことが最優先で自分のことは後回しになるのだろうと思う	.78	.19	-.07	
3. やりたいことがあっても、自由に行動できなくなりそうな気がする	.71	-.05	.06	
11. 親や親戚との関係に気を使いそう	.67	-.02	.04	
6. 結婚生活はいろいろ面倒なことが多そう	.64	-.21	.07	
9. 独身の時と同じようには仕事ができなくなると思う	.59	.02	.10	
4. 結婚生活はいろいろと楽しいことが多そうだ。	.05	.81	.03	
8. 子育ては楽しそう	.02	.71	-.01	
12. 心からくつろげる場所ができると思う	-.06	.71	.02	
1. 結局、家事や子育ては、主に妻が担うのだろうと思う	-.07	-.06	.71	
7. 家計費は夫がほとんど稼ぐのだろうと思う	.03	.02	.51	
10. 重要なことは、夫が決めるようになると思う	-.05	.04	.49	
2. 子どもが小さいうちは、母親がそばにいるようになると思う	.21	.10	.49	
因子間相関	1	2	3	
	1	1.00	-.21	.48
	2	-.21	1.00	.04
	3	.48	.04	1.00

信頼性を確認するため α 係数を見たところ自由の制約は $\alpha=.88$ 幸せな生活は $\alpha=.79$ 性別分業は $\alpha=.65$ だった。また、I-T相関を見たところ、自由の制約は $r=.72$ から $r=.82$ 、幸せな生活は $r=.83$ から $r=.85$ 、性別分業は $r=.64$ から $r=.76$ であった。結婚イメージの平均値は自由の制約5.02 (1.13)、幸せな生活 4.30 (1.23)、性別分業 4.08 (1.06)で、自由の制約が最も高かった。

属性による平均値の違い 次に、属性による違いを検討する。自由の制約と性別分業に性差が見られ、共に女性の方が有意に高かった (Table 2)。年齢との関連を見るため、25歳から29歳のL群、30歳から34歳のM群、35歳から39歳のH群に分けて比較した。その結果、年齢による違いが見られたのは男性のみで、H群が他の若い群よりも自由の制約が有意に高く、幸せな生活が有意に低いことが示された。性別分業には違いが見られなかった (Table 3)。年収による違いを見たところ、男

女とも有意差は見られず、男性で年収200万円以上、女性で100万円以上の層においては結婚イメージに年収による違いはないことが示された。地域差を見るため、首都圏と大都市のない地方の県との比較をしたところ、有意差は見られず、結婚イメージは居住地域が都市部であるか否かとの関連は示されなかった。

Table2 結婚イメージの性差

結婚イメージ		平均値 (SD)	t値
自由の制約	男性	4.75 (1.16)	-7.64***
	女性	5.29 (1.03)	
幸せな生活	男性	4.33 (1.25)	0.69
	女性	4.27 (1.21)	
性別分業	男性	3.94 (1.03)	-3.95***
	女性	4.21 (1.08)	

注: *** $p < .001$

Table3 結婚イメージの年齢差

性別	結婚イメージ	年齢群	平均値	SD	F値	有意確率	
男性	自由の制約	25-29	4.63	(1.09)	4.91	$p < .01$	
		30-34	4.63	(1.19)			①②<③
		35-39	4.98	(1.18)			
	幸せな生活	25-29	4.55	(1.15)	5.28	$p < .01$	
		30-34	4.34	(1.25)			①②>③
		35-39	4.10	(1.31)			
	性別分業の生活	25-29	4.01	(1.09)	0.99	n.s	
		30-34	3.85	(1.05)			
		35-39	3.96	(0.93)			
女性	自由の制約	25-29	5.29	(1.02)	0.36	n.s	
		30-34	5.24	(1.10)			
		35-39	5.34	(0.97)			
	幸せな生活	25-29	4.38	(1.23)	1.19	n.s	
		30-34	4.27	(1.28)			
		35-39	4.17	(1.11)			
	性別分業の生活	25-29	4.19	(1.08)	0.05	n.s	
		30-34	4.21	(1.11)			
		35-39	4.23	(1.07)			

注: ①25-29 ②30-34 ③35-39

妥当性の検討 妥当性の検討として、結婚イメージと結婚意欲の関連を見るため、結婚活動への態度と結婚希望時期による一要因の分散分析を行った。まず「一定の年齢まで適当な相手と出会わなかったらどうするか」について、その他を選択した者を欠損値とした上で分析を行ったところ、男女とも自由の制約と幸せな生活に有意差が見られた。多重比較の結果、男性は、「生涯独身の心づもりをする」は、他の選択肢よりも有意に自由の制

約が高く、「幸せな生活」は有意に低かった。女性では自由の制約および幸せな生活において有意差が見られ、「生涯独身の心づもりをする」と「何もせず成り行きに任せる」は、その他の選択肢との間に、それぞれ有意差が見られた。自由の制約では、「生涯独身の心づもりをする」が最も高く、幸せな生活は、「生涯独身の心づもりをする」が最も低かった (Table 4)。

Table4 一定の年齢で相手がいない場合の行動の結婚イメージによる違い

性別	結婚イメージ	一定の年齢で相手がいない場合の行動	度数	平均値 SD	F値	有意確率
男性	自由の制約	条件を譲歩変更して範囲を広げる	60	4.46 (1.13)	5.61	$p < .001$ ⑤>①②③①
		紹介や婚活で出会いを増やす	126	4.74 (0.94)		
		自然な出会いを待つ	80	4.61 (1.08)		
		何もせず成り行きに任せる	115	4.90 (1.06)		
		生涯独身の心づもりをする	77	5.25 (1.35)		
	幸せな生活	条件を譲歩変更して範囲を広げる	60	4.38 (1.20)	10.67	$p < .001$ ⑤<①②③①
		紹介や婚活で出会いを増やす	126	4.75 (1.01)		
		自然な出会いを待つ	80	4.43 (1.00)		
		何もせず成り行きに任せる	115	4.25 (1.21)		
		生涯独身の心づもりをする	77	3.63 (1.61)		
	性別分業の生活	条件を譲歩変更して範囲を広げる	60	3.84 (0.90)	1.1	<i>n.s</i>
		紹介や婚活で出会いを増やす	126	3.89 (0.99)		
		自然な出会いを待つ	80	3.95 (0.97)		
		何もせず成り行きに任せる	115	3.99 (1.02)		
		生涯独身の心づもりをする	77	4.15 (1.10)		
女性	自由の制約	条件を譲歩変更して範囲を広げる	33	5.04 (0.92)	9.13	$p < .001$ ⑤>④>③②①
		紹介や婚活で出会いを増やす	138	5.17 (0.95)		
		自然な出会いを待つ	52	4.86 (0.98)		
		何もせず成り行きに任せる	147	5.40 (1.03)		
		生涯独身の心づもりをする	97	5.76 (1.03)		
	幸せな生活	条件を譲歩変更して範囲を広げる	33	4.75 (0.96)	17.07	$p < .001$ ⑤<④<⑤②①
		紹介や婚活で出会いを増やす	138	4.77 (0.94)		
		自然な出会いを待つ	52	4.44 (1.02)		
		何もせず成り行きに任せる	147	4.05 (1.24)		
		生涯独身の心づもりをする	97	3.65 (1.34)		
	性別分業の生活	条件を譲歩変更して範囲を広げる	33	4.23 (0.99)	0.17	<i>n.s</i>
		紹介や婚活で出会いを増やす	138	4.25 (1.05)		
		自然な出会いを待つ	52	4.11 (1.14)		
		何もせず成り行きに任せる	147	4.21 (1.14)		
		生涯独身の心づもりをする	97	4.24 (1.10)		

注：⑤生涯独身の心づもりをする ④何もせず成り行きに任せる ③自然な出会いを待つ ②紹介や婚活で出会いを増やす
①条件を譲歩変更して範囲を広げる

「遅くともいつ頃までに結婚したいか」との関連では、女性のみ自由の制約に有意差があり、「結婚するつもりはない」「時期はわからない」の順に、他の群より有意に高かった。幸せな生活は男

女とも有意であり、男性は「2年以内」が最も高く、「結婚するつもりはない」が最も低かった。女性は「1年以内」が最も高く、「結婚するつもりはない」が最も低かった（Table 5）。

Table5 遅くともいつ頃に結婚したいかの結婚イメージによる違い

性別	結婚のイメージ	結婚希望時期	度数	平均値	SD	F値	有意確率
男性	自由の制約	するつもりはない	60	4.88	(1.56)	1.04	<i>n.s</i>
		時期はわからない	196	4.82	(1.15)		
		3年以上先	34	4.61	(1.17)		
		3年以内	88	4.73	(0.97)		
		2年以内	59	4.69	(1.00)		
		1年以内	43	4.45	(1.13)		
		幸せな生活	するつもりはない	60	3.29		
時期はわからない	196		4.27	(1.25)			
3年以上先	34		4.34	(1.06)			
3年以内	88		4.72	(1.03)			
2年以内	59		4.80	(0.90)			
1年以内	43		4.57	(1.20)			
性別分業の生活	するつもりはない		60	3.93	(1.13)	0.72	<i>n.s</i>
	時期はわからない	196	3.98	(1.06)			
	3年以上先	34	4.04	(0.89)			
	3年以内	88	3.81	(1.00)			
	2年以内	59	4.06	(0.89)			
	1年以内	43	3.80	(1.04)			
	女性	自由の制約	するつもりはない	45	5.99		
時期はわからない			237	5.33	(0.91)		
3年以上先			27	5.11	(1.41)		
3年以内			68	5.27	(0.90)		
2年以内			55	5.17	(0.85)		
1年以内			48	4.72	(1.25)		
幸せな生活			するつもりはない	45	2.79	(1.37)	21.28
		時期はわからない	237	4.27	(1.08)		
		3年以上先	27	4.27	(1.16)		
		3年以内	68	4.67	(0.95)		
		2年以内	55	4.55	(1.00)		
		1年以内	48	4.80	(1.16)		
		性別分業の生活	するつもりはない	45	4.24	(1.22)	
時期はわからない			237	4.20	(1.09)		
3年以上先	27		4.33	(0.93)			
3年以内	68		4.30	(0.88)			
2年以内	55		4.17	(1.11)			
1年以内	48		4.06	(1.25)			

注：①結婚するつもりはない ②時期はわからない ③3年以上先 ④3年以内 ⑤2年以内 ⑥1年以内

異性との交際状況による違いを男女別に検討したところ、自由の制約は女性のみ有意差があり、「いない」群は、「結婚を視野に交際中」群より有意に高かった。幸せな生活は、男女とも有意差があった。男性では、「結婚を視野に交際中」群が最も高く、次に、「いるが結婚はまだ考えていない」

「片想い中」群が高く、「いない」群は最も低かった。女性は、「結婚を視野に交際中」群が他の群より有意に高かった。つまり、性別分業以外の2つの結婚イメージは、異性との交際状況と関連することが明らかになった (Table 6)。

Table6 異性との交際状況による結婚イメージによる違い

性別	結婚のイメージ	異性との交際状況	度数	平均値	SD	F値	有意確率
男性	自由の制約	いない	244	4.86	(1.23)	2.10	n.s
		片想い中	41	4.74	(1.00)		
		いるが結婚はまだ考えていない	68	4.74	(1.08)		
		結婚を視野に入れて交際中	118	4.54	(1.07)		
	幸せな生活	いない	244	4.07	(1.34)	10.27	$p < .001$ ④>③②>①
		片想い中	41	4.69	(0.90)		
		いるが結婚はまだ考えていない	68	4.33	(1.03)		
		結婚を視野に入れて交際中	118	4.77	(1.11)		
	性別分業	いない	244	3.99	(1.03)	0.71	n.s
		片想い中	41	4.05	(1.04)		
		いるが結婚はまだ考えていない	68	3.89	(0.88)		
		結婚を視野に入れて交際中	118	3.85	(1.07)		
女性	自由の制約	いない	258	5.44	(1.04)	4.03	$p < .01$ ④<①
		片想い中	31	5.25	(0.99)		
		いるが結婚はまだ考えていない	67	5.20	(1.01)		
		結婚を視野に入れて交際中	110	5.05	(0.98)		
	幸せな生活	いない	258	3.97	(1.19)	15.66	$p < .001$ ④>③②①
		片想い中	31	4.35	(1.07)		
		いるが結婚はまだ考えていない	67	4.35	(1.17)		
		結婚を視野に入れて交際中	110	4.86	(1.07)		
	性別分業	いない	258	4.25	(1.09)	0.83	n.s
		片想い中	31	3.94	(1.01)		
		いるが結婚はまだ考えていない	67	4.21	(1.17)		
		結婚を視野に入れて交際中	110	4.25	(1.00)		

注：①いない ②片想い中 ③結婚は考えていない ④結婚を視野に交際中

以上の結果から、本研究の結婚イメージ尺度には一定の妥当性があると判断した。

結婚希望時期を目的変数とする重回帰分析 結婚希望時期（遅くともいつまでに結婚したいか）を目的変数、結婚イメージと年収、年齢を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を男女別に行った。その結果、男性は幸せな生活と年齢が有意な

変数であるのに対し、女性は幸せな生活、自由の制約が有意な変数であった。男性の場合、幸せな生活イメージが弱いほど、また年齢が上がるほど結婚希望時期が遅くなっていた。年収および性別分業は有意ではなかった。女性は、自由の制約イメージが強いほど、幸せな生活イメージが弱いほど、結婚希望時期が遅くなっていた (Table 7)。

Table7 遅くともいつまでに結婚したいか を目的変数とする重回帰分析

目的変数	従属変数 遅くともいつまでに結婚したいか	
	β	
説明変数	男性	女性
自由の制約	-0.03	-0.16 ***
幸せな生活	0.26 ***	0.23 ***
性別分業の生活	-0.03	0.01
年収4クラス	0.03	0.05
年齢3群	-0.13 ***	-0.06
R^2	0.10 ***	0.10 ***

注 *** $p < .001$

考 察

結婚イメージ尺度の信頼性と妥当性 本研究の目的は、未婚者における結婚イメージ尺度を作成することであった。未婚者へのインタビューから得た14項目の結婚イメージは因子分析の結果、自由の制約、幸せな生活、性別分業の3因子に分類された。 α 係数とI-T相関の結果から、十分な信頼性が認められた。また、結婚意欲として結婚希望時期及び結婚活動への態度から妥当性の検討を行ったところ、自由の制約と幸せな生活はそれぞれ結婚意欲と関連することが示された一方、性別分業は、結婚意欲とは関連が見られなかった。以上より、結婚イメージ尺度には一定の妥当性があると判断した。

性別分業 性別分業にはどの要因でも有意差がみられなかった。このことから、性別分業のイメージには、日本の家族の文化が色濃く反映されており、変化しにくいイメージと考えられる。男女共同参画に関する世論調査（内閣府、2019）によれば、女性の就業継続を支持する考え方は、男女とも6割前後が支持している。また、固定的性別役割分担意識は、賛成が35%と過去最少になり反対派が59.8%と過去最多となっている。この報告と本研究の結果を比較すると、本研究の結婚の性別分業のイメージの平均値は男性3.94（ $SD=1.03$ ）女性が4.21（ $SD=1.08$ ）と、より伝統的である。つまり、一般論としては、性別分業ではなく協働家族の方が良いと思うものの、自分の問題として

結婚生活をイメージする場合はそうはいかず、従来の性別分業の生活になるのだらうとイメージしていると解釈できる。

橋本（2011）は、日本人は実際には相互独立的な生き方を望んでいるにもかかわらず、世間一般の人たちは相互独立的な行動をとるとまわりの人たちから嫌われてしまうのだらうと予想するために、相互協調的な振る舞いを採用しているのだらうと述べている。つまり、例え本人が、性別分業に否定的であっても、配偶者はそれを期待するであろうと考える場合、結婚生活のイメージは性別分業の生活のイメージが強くなると考えられる。このように、相互協調的な生活である性別分業イメージは、将来の配偶者の期待の予測と密接に関連し、その予測は文化的に共有された信念に基づくために、どのような群においても、違いが見られないのではないかと解釈できる。

また性別分業と自由の制約は、異なる次元として抽出された。これは、性別分業が、個人の生活の文脈によって、自由の制約になるとは限らないことを示している。例えば、仕事での個人目標追求を志向する女性の場合には、性別分業は自由の制約となる可能性が高いが、女性全てが仕事で個人目標追求をしようとするわけではない。男性の場合にも、稼得役割が必ずしも個人としての自由の制約となるわけではない。このように、性別分業は、個人の生活の文脈により捉え方が異なるために、自由の制約とは独立の次元として抽出されたのだと考えられる。

柏木（2003）は、社会経済的変動に伴い、男女と

もに従来の性別役割分業が最適性を失い、我々の心理的变化がそれに追いつかない移行期には、不適応現象が生じるとしている。性別役割のイメージは、結婚希望時期などの結婚への態度とは関連が見られなかった。これは、性別分業のイメージそのものが結婚への態度に影響するのではなく、性別分業によって生き方の自由が制約されると感じるか否かには個人の文脈による違いがあり、自由が制約されると感じる場合に、結婚への態度が消極的になるものと推察される。

自由の制約 自由の制約は、その項目内容から、個人の経済、時間という有限の個人的資源の配分についての制約感であると解釈できる。未婚であれば、それらのほぼ全てを個人目標追求に配分できるが、結婚すると、家族形成のためにも多くの資源が必要となるため、個人目標追求が制約されるというイメージの因子と言える。

結婚希望時期との関連では、女性のみ有意差が見られ、「結婚するつもりはない」「時期はわからない」群が、それ以外の群よりも高かった。男性の平均値も有意ではないものの、同様の傾向が見られる。そして、「時期はわからない」とする群は男女とも最も人数が多い。つまり、自由の制約イメージが強いほど、結婚希望時期を具体的にイメージしにくいものと解釈できる。

一方、年収による有意差は見られないことから、これらの制約感を経済的制約感ではない可能性が示された。さらに、「親や親戚との関係に気を使う」「面倒なことが多そうだ」など、心理的な自由の制約を意味する項目も同じ因子に含まれていることを考えると、自由の制約因子は心理的制約感であると解釈できる。

異性との交際状況による違いを男女別に検討したところ、自由の制約は女性のみ有意差があり、「交際相手がいない」群は、「結婚を視野に交際中」群より有意に高かった。このことから、自由の制約イメージが強い群では結婚意欲が低く、交際自体にも消極的であるために、交際相手がいないのではないかと推測できる。

幸せな生活 幸せな生活は、結婚生活や子育てに

楽しみとしてのプラスのイメージを持ち、結婚によって作る家庭に、くつろげるイメージを持っているという内容である。一定の年齢で相手がいない場合の行動との関連では、男女とも、幸せな生活イメージは、「生涯独身の心づもりをする」群が低く、女性では「何もせず成り行きにまかせる」を選んだ群もそれ以外の群より有意に低かった。恋愛結婚が主流の今日、一定の年齢以降「何もせず成り行きに任せる」のは、ほぼ「生涯独身の心づもりをする」ことと近いと考えられることから、幸せな生活イメージは結婚行動を左右する要因と言えるだろう。

同様に、「遅くともいつまでに結婚したいか」という結婚希望時期では、男女とも、「結婚するつもりはない」群が他の群より有意に低いことから、幸せな生活イメージは、結婚希望時期というよりも、結婚意欲そのものと関連するものと解釈できる。

幸せな生活は、男女とも異性との交際状況による有意差があり、男性では「結婚を視野に交際中」群が最も高く、次に、「いるが結婚はまだ考えていない」「片思い中」群が高く、「いない」群は最も低かった。女性は、「結婚を視野に交際中」群が他の群より有意に高かった。つまり、男女とも異性との交際状況と幸せな生活イメージは関連があると言える。

結婚イメージと文化 3つの結婚イメージの平均値を比較すると、自由の制約イメージが最も高かった。日本など東アジアでは相互協調の文化が優勢であり (Markus & Kitayama, 1991)、日本における相互協調の形態は、役割志向と情緒的態度であるとされている (北山・唐沢, 1995)。つまり、相互協調が優勢な日本では、さまざまな場面において、責任と相手の気持ちへの配慮が求められる。そのため、結婚生活では自分の行動を自分の意思だけで決めることはできず、常に相手の立場でも考える必要がある。このことが、家計収入にかかわらず、結婚生活では生活全般にわたり、自分の自由にはできなくなるだろうという制約感に繋がっているのではないだろうか。

また、相互協調性が優勢な文化では、責任や役

割が重視されるため、結婚についての促進焦点の幸せな生活よりも、結婚による失敗を回避するための予防的焦点として自由の制約が高かったのではないかと考察される。

結婚希望時期を左右する要因 重回帰分析の結果から、男女とも、幸せな生活イメージが低いほど、自由の制約イメージが高いほど、結婚希望時期が遅い、あるいは、結婚意欲が低くなることが明らかになった。また、年齢が増すほど結婚希望時期が曖昧、もしくは、結婚するつもりがなくなることが明らかになった。一方、男性で年収200万円以上、女性で100万円以上の層においては、年収は結婚希望時期には影響しないことが明らかになった。また、性別分業イメージは結婚予定時期とは関連がないことが明らかになった。これまで、若者の経済的格差が晩婚化・未婚化の要因と指摘されてきたが、年収が高くなれば結婚行動が積極的になるわけではなく、個々の結婚イメージが結婚行動を左右することが明らかになった。

家族の個人化と言われるように、結婚や子どもが個人の選択の問題となったことで、どのような生き方が自分にとって幸せかを考えた上で、結婚するか否か、するならばいつ頃迄にしたいのか、適当な相手がいなかったらどうするのか、という結婚行動が選択されていることが示唆された。一方で、性別分業のイメージは、日本の文化と密接に関わっており、自分の価値観がどうであろうとも、結婚を性別分業の生活を前提に考えていることが明らかとなった。

今後の課題 今回は、性自認や性的志向性などの視点は入れることができなかった。そのため、結婚するつもりはないのうちに、本研究で扱わなかったこれらの変数が関与している可能性がある。

引用文献

- 橋本 博文 (2011). 相互協調性の自己維持メカニズム 実験社会心理学研究, 50, 182-193.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- 伊藤 裕子・相良 順子 (2015). 結婚コミットメント

尺度の作成—中高年期夫婦を対象に— 心理学研究, 86, 42-48.

柏木 恵子 (2003). 家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点— 東京大学出版会

北山 忍・唐澤 真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35, 133-163.

国立社会保障・人口問題研究所 (2016). 第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）
https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report3.pdf

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

松田 茂樹 (2016). 平成27年度少子化社会に関する国際意識調査報告書 調査結果の解説 https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h27/zentai-pdf/pdf/s_3_1.pdf

内閣府 (2004). 平成16年版少子化社会白書
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/white-paper/measures/w-2004/pdf_h/pdf/g1020110.pdf

内閣府 (2016). 平成27年度少子化社会に関する国際意識調査報告書 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h27/zentai-pdf/index.html>

内閣府 (2019). 「共同参画」2019年12月号
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2019/201912/201912_02.html

Stacey S. Park & Lee A. Rosen. (2013). The Marital Scale: Measurement of Intent, Attitudes, and Aspects Regarding Marital Relationships. *Journal of Divorce & Remarriage*, 54, 295-312.

山田昌弘 (2019). 結婚不要社会 朝日新書

山村賢明 (2017). 日本人と母：文化としての母の観念についての研究 東洋館出版社

謝辞：この研究は、JSPS 科研費 JP18K 03045 の助成を受けて行ったものです。

(2022.9.28 受稿, 2022.11.1 受理)